

行政の視点から見た被災地対応

古橋勝也 安寧の都市ユニット第一期履修生、京都府消防安全課主任

私は京都府の消防安全課で、消防行政などを担当しています。今回の東日本大震災の被災地には業務上3回ほど派遣されました。行政職ですので専門的な津波の分析や家屋倒壊の修復、あるいは医療活動などはしていません。しかし、行政職として現地で多くのことを経験し、考えることがあります。きょうは、そういったことを中心にお話いたします。

関西広域連合としての京都府の支援

最初に、京都府としての今回の東日本大震災への取り組みを、少しご紹介します。

今回われわれは関西広域連合の主導で、各府県がそれぞれ支援の相手方を決めて、カウンターパート方式で被災地支援を行ないました。具体的には滋賀県と京都府は福島県を支援し、大阪府と和歌山県は岩手県を、兵庫県、鳥取県、徳島県は宮城県を支援するというように、相手方を決めて集中的に支援を行ないました。防災に関わる人間にとってはよく知られた手法ですが、当たり前なことでもしっかりと対応することができたということで評価をいただいています。ただ、関西広域連合だけでなく、国レベルでもこのような対応ができたのもっとよかったのではないかと考えています。

カウンターパート方式の拡充を

今回、政府があまり機能しなかったという批評がマスメディア等から出ています。しかし、実態は、たとえば厚生労働省の主導でDMAT(災害派遣医療チーム)が医療供給過剰になるくらい被災地に派遣されていましたし、消防機関も緊急消防援助隊として全国から被災地に集まりました。警察の広域緊急援助隊もかなりの隊数が集まりました。もし、これが、国がしっかりと主導してカウンターパート方式で対処していたらどうだったかなと現地で感じました。

たとえば、DMATは厚生労働省が示す参集拠点を参考に、都道府県の要請で動いたのですが、京都府のDMATは岩手県、宮城県、福島県に入って活動しました。いっぽう、消防庁主導の緊急消防援助隊は、京都市消防局を中心に府内の消防本部で編制し、宮城県に入って、南三陸町などで活動していました。たとえば「京都府のDMATや緊急消防援助隊と一緒に福島に行け」という国の指導があれば、より効率的に機能できたのではないかと考えています。京都府内の消防本部の救急車に京都DMATが乗って一体的な活動をすることもでき

たのではないかと思います。カウンターパート方式には高い評価をいただいているものの、そういった反省面もじつはあったと思っています。

京都府の無料シャトルバスに乗って福島に

京都府は、京都府庁と福島県とのあいだで、シャトルバスを運行しています。約60人が乗れるバスで6日に1回ほどのペースで定期的に往復しています(8月末に第34陣で終了)。京都から福島県には避難所の支援要員、ボランティアの方がたや教員がこのバスに乗り、支援物資も若干は載せながら現地にむかいます。帰りは、空ではもったいないということで、福島県から京都あるいは関西方面に避難を希望される方などを乗せます。

私はこれまで3回派遣されました。最初は3月17日から28日、現地事務所の立ち上げや現地のニーズの把握、シャトルバスの運行体制の構築などが目的でした。2回めは4月半ば、滋賀県と京都府の両知事が被災地を訪問するにあたって、現地案内人の役割で派遣されました。当時、現地にいちばん長くいた職員が私だったからです。5月の3回めは、福島県庁の災害対策本部に設置された京都府の現地事務所要員としてまいりました。また、明日からは、現地の消防団活動の取材等の目的で福島県へ行きます。

支援活動を支えるロジスティクス

そういったなかで、見たり聞いたりして考えたこと、感想めいたことを挙げてゆきます。

最初に紹介するのが、今回の支援業務などを行っている私の同僚で、京都府の危機管理・防災課の高橋厚人さんの言葉です。彼には、私が被災地に行く前に、「いるモン用意するし、なんでも言うてや」と言っていただきました。

防災や危機管理はかねてから興味のある分野でしたので、被災地に行くこと自体には不安も心配もまったくありませんでした。しかし、いろいろなモノがいる。交通手段は、食料は、装備品は、どうしようかと、いろいろ考えていたときでした。そういうときに、高橋さんに声をかけていただいて、すごく心強かったのをおぼえています。

▶資料1 会津若松市の位置



安寧の都市ユニットの教官には、ロジスティクスがご専門の方が何人かおられます。講義のなかでもロジスティクスの話はよく取り上げられますが、高橋さんの言葉はロジスティクスを象徴しているのではないかと思います。私たち公務員にも、被災地に行かれる災害ボランティアの方がたにも使命感の強い方が多く、「とにかく前線に、現地に行きたい」という思いが強い。そういうなかで、高橋さんは府庁内でロジスティクスというか、われわれの活動をひたすら支援する立場にいました。

役所ですので、緊急的に調達、対応を行なうのはやはり苦手です。がんじがらめのしくみや規制もあります。そういったなかで、高橋さんは役所組織として不得手とする緊急対応から物資の調達、現地への輸送などをひたすら仕切っておられました。

ロジスティクスは「後方支援」と訳され、後ろ向きというか、表舞台に出ないイメージがどうしてもつきまといます。しかし今回、実際に「後方支援」を受けてあらためて実感したのが、ロジスティクスは作戦行動そのもの、支援活動そのものなんだということでした。

食料と燃料が続くかぎり、受け入れます

会津若松市内の東山グランドホテルは、「食料と燃料が続くかぎり受け入れます」という方針を表明されました。先ほど申しあげた京都シャトルバスで派遣された職員は会津若松市に滞在して、避難所運営や支援物資の仕分けなどに従事していました。実際に避難所の片隅に寝泊まりするわけですが、到着初日は連絡引き継ぎ等のため、東山グランドホテルにお世話になりました。

会津若松市は福島県の中央あたりに位置していて、原子力発電所とはかなり離れています。このホテルのある東山温泉という観光地・温泉街も、福島県の会津若松市の一角にあり、震災後観光客はすべてキャンセルという状態で、宿泊客はわれわれのように支援に行っている方や、沿岸部で被災して避難された方ばかりでした。経営がかなり逼迫されているなかで聞いた一言が、「それでも燃料と食料が続くかぎりはずんぶ受け入れます」でした。

被災地福島の現実

【資料1】は福島県の地図です。会津若松市の位置はおわかりでしょうか。原子力発電所は東の沿岸部です。原子力発電所から会津若松市へは、阿武隈高地と奥羽山脈の二つの山を越えないといけません。地元の方に聞くと、生活圏はむしろ新潟県寄り、たとえば海水浴には太平洋側ではなく日本海側に出るそうです。そんな地域ですが、「福島県」ということで、風評被害といいたまうでしょうか、予約はすべてキャンセルされて

▶資料2 個人線量計

月 日	主な活動場所	計測時刻	線量計計測値 (mSv)	放射線量 (μ Sv/h)
3月17日	京都～新潟	翌 02:00	0	—
3月18日	新潟～会津若松	21:30	0.002	0.10
3月19日	会津若松	18:20	0.004	0.096
3月20日	会津若松	20:00	0.007	0.12
3月21日	会津若松	21:00	0.010	0.12
3月22日	会津若松	21:00	0.012	0.083
3月23日	会津若松	21:30	0.015	0.12
3月24日	会津若松	23:00	0.017	0.078
3月25日	会津若松	19:00	0.019	0.10
3月26日	会津若松	22:00	0.022	0.11
3月27日	福島 相馬 仙台	23:30	0.027	0.20
3月28日	会津若松～京都	21:00	0.030	0.14
3月29日	京都	21:00	0.032	0.083

いました。

ちなみに、私が最初に訪れたとき、個人線量計を装着して活動しました。計測時刻をメモして値を読んで、前回値との差分を経過時間で割って1時間あたりの放射線量を出してみました。

【資料2】を見るとおわかりいただけるように、3月29日に京都に帰ってきたとき、会津若松市にいたときの値とさほど変わらない値でした。工学的には、線量計の単位がミリシーベルトで小数点第3桁までしかないのが、有効数字に問題があるかもしれませんが、おおよその規模を評価するにはこれでよいのではないかと思います。こういった評価があっても風評被害は、地域の人たちの暮らしや経済活動に大きなダメージとしてのしかかっています。

こんなに安心した顔を見たのは初めてです

次は現地のある避難所のリーダーからいただいた言葉です。「避難者の方の、こんなに安心した顔を見たのは初めてです」。これはシャトルバスで福島県から京都に避難される最初の便を送りだすときに、現地のリーダーの方からいただいた言葉です。

じつは、現地で活動していて、シャトルバスで東北から関西に避難していただくことがほんとうによいのかどうかと、悩んでいた時期もありました。東北と関西とは文化も言葉も違います。縁もゆかりもない土地に行くのがよいことなのかと悩みました。3月22日のことでしたから、震災直後の状況のなかで、ひさしぶりの明るいニュースということでそう言っていたのかもかもしれません。しかし、そのように思っていただけの人一人でもいるということは、やはり現地で活動するなかで大きな力になりました。

桐山さんには、ついていかざるを得ないんです

次は5月に行ったときの話です。「ビッグパレットふくしま」という大規模な避難所がありました。京都の「みやこめっせ」とか、「インテックス大阪」といったような施設です。その責任者の方から聞いた話です。「最初はカチンとくるけど、ぜんぶ自分でやりはじめて、結局はついていかざるを得ないんですよね」。

桐山義章さんという方は、京都災害ボランティアセンターのスタッフで、この「ビッグパレットふくしま」に延べ数か月

駐在されています。現地では「ビッグパレットの主」ともいわれているようです。桐山さんは、シャトルバスでわれわれ府職員と一緒に福島県に行って避難所に入り、避難所の運営を支援されています。かなりのやり手で、避難所でお手伝いだけでなく運営にも加わって、「あれもやらなあかん」、「これもやらなあかん」と提案される。

現地の避難所を運営されている方も、いきなり京都からきたわけのわからないやつが「あれもしろ」、「これもしろ」と言うものですから、最初はけっこう反発を買うこともあったようです。ところが、桐山義章さんは提案したことをまず自分でやりはじめる。その結果、「京都からきた人がやっているのに私たちがやらないわけにはいかない」という感じになる。

桐山さんは、単なる避難所運営だけでなく、避難者同士の交流をすすめるにはどうしたらいいか、あるいは避難者の方がたにもなにかやってもらえることはないか、などさまざまな取り組み、活動を行ない、言い尽くせないくらい功績をあげておられます。いまや、なくてはならない存在です。福島県からも、「桐山さん、あそこの避難所が運営に困っているので助けてくれませんか」と依頼されるほどに評価をいただいています。

役人的な発想で役所に閉じこもって現地の話を聞くだけでなく、現地に飛び込んで有言実行する。互いの考えが相互に浸透し、馴じまないと信頼もされなだらうし、ほんとうの支援にもならないということを思い知らされました。

「いつか戻れる」という思いが心の支えに

その桐山さんは、最近福島に滞在されていることが多いのですが、7月に京都に戻ってこられたときになんとかお会いしてお話しするなかでこうおっしゃいました。「津波で流されようが放射性物質で汚染されようが、いつか戻れるという思いがその方の心の支えになっている」。私は小さいころから何回も引越しているもので、地元愛は少ないかもしれませんが。そういう私ですら、生まれ育ったところには、それなりの愛着があります。

講義のなかで「安寧の都市とはなんだろう」という議論を何回かしていますが、安寧の都市というのは自分の故郷が大きな要素なのではないかと私は考えています。まさにそういう思いがあらわれた言葉ではないかと思えます。

先日、福島県のボランティアの方や福島県の学生さんが京都に集まって、意見交換や情報交換、発表などをする場がありました。そのときに配布された資料に、とても印象的なメッセージがありましたので紹介させていただきます。ある学生さんのメッセージです。

「ぼくには大好きな風景があります。ぼくの中学時代の通学路なんですが、見渡すかぎり一面に田んぼが拡がり、秋には稲穂が夕日に照らされて、それはとてもきれいなんです。福

島県はいま放射性物質により農業などの自然を利用した産業が危機的な状況にあります。それでもぼくはこの景色を忘れるつもりはありません。それをどうかぼくたちの次の世代にも見せられるように、ただただ祈るばかりです」。

安寧の都市を考えるにあたってヒントになるのではないかと、桐山さんの言葉とあわせて紹介させていただきました。

デスクワークとフィールドワーク

安寧の都市ユニットには、私のような行政職や消防職の方、民間企業の方など、いろいろな履修生がいます。社会人の履修生が多いということもあって出席率は高く、そのうえ講義ではディスカッションや意見交換も多く、またフィールドワークなどをとおして、横のつながりもかなりあります。そういう履修生の一人の奈良県庁の安本理抄さんから、「奈良県も16日から宮城県に入ることになりました」という連絡をいただきました。

3月14日でこのときはまだかなり混乱している状態でした。現地の情報がなかなか入らないなかで、組織同士で情報を交換しても上っ面をなでるだけに終わってしまう。ところが、同じ履修生の顔のみえる関係で情報を交換すると、必要な情報がけっこうポンポンやりとりできる。被災地にむかう道中の高速道路の状況はどうだったかとか、路面がシャーベット状になっているとか、雪が降っているとか、現地の気候はどうだ、やはり線量計はあるのかとか。細かい内容ですが実務者レベルで、そういった実のある情報交換は、安本さん以外の履修生の方ともさせていただきました。

組織でする仕事でも、最後はやはり人と人とのつながりが重要だと感じました。

阪神・淡路大震災の経験をしているからといって、われわれの発言に重みがあるわけではない

講義の一環で、神戸でフィールドワークというか、見学と視察の機会がありました。そのときに配られた資料に注目すべき意見がありましたので抜粋しました。関西大学商学部准教授の三谷真先生のご指摘です。

阪神・淡路大震災と今回の東日本大震災との比較はよくあります。これについて三谷先生は、「震災の経験をしているからといって、われわれの発言に重みがあるわけではない。『神戸では』という言い方は控えたほうがいい」と指摘されています。

私も現地に行ってそのように思いました。現地ではいま、言葉は悪いのですが、押しつけのような提案や提言などがかなり集まっていて、正直に言って現地の方も辟易としている面がじつはあります。

阪神・淡路大震災はたしかにわが国が経験したなかでも大規模な震災で、経験者の発言には説得力と発言力があります。

▶資料3 がんばろう東北・復興応援フェア in 京都(6月18日(土)、19日(日) 京都駅)



しかし、今回の東日本大震災とは規模や地域特性も違うでしょう。とくに津波や原子力災害、風評被害など、特性がかなり違います。阪神・淡路大震災の例をそのまま適用するだけでは、あまり納得感や実効性を得られないというのが、私の正直な感想です。

たとえば、「阪神・淡路大震災のときには仮設住宅をつくった、こんな取り組みでした。仮設住宅はこうあるべきだ」と提言しても、現地では仮設住宅の入居希望者はあまり多くないのです。むしろ仮設住宅にどうしたら入ってもらえるかが重要になっている地域もあります。要配慮者ほど仮設住宅ではなくて借り上げ住宅を希望するなど、現地の実情があるなかで阪神・淡路大震災の経験をそのまま適用しても、なかなか受け入れられないでしょう。

やはり現地の情報や感覚、実情をしっかりと感じたいので、阪神・淡路大震災の経験は生かされるべきでしょう。やはり現地とつながり、現地の感覚や空気を感じて、一呼吸おいてみるべきではないかと感じています。

**日本は復興できると思いますか。「大丈夫！もちろん！」
なぜそう思うのですか。「えー、日本だから」**

これまで私がかつても印象的だった言葉があります。避難所の受付にいた米国人の先生へのインタビューが偶然現地のニュースで流れていました。「日本は復興できると思いますか」、「大丈夫！もちろん！」と。「なぜそう思うのですか」、「えー、日本だから」。こうおっしゃったのです。現地で活動していて、この一言に私自身とても大きな元気をもらいました。

日本が日本であるからという理由で復興できる、外国人はこうみている。「外国からみた日本という国はそんなにすばらしいのか」と再認識させられました。被災地での最初の2週間はとくにひどい状況でしたが、私はこの一言でほんとうに救われた気がします。

ほんとうの支援はどうあるべきか

結局、なにを私は感じたのかとあらためて考えると、やはり現地の情報は現地に行かないとわからないということです。しかも、現地の状況は日々刻々と変わるので。昨日のニーズはきょうの迷惑かもしれない。でも明日はまたニーズになるかもしれない。

最初に行った2週間弱でも、行ったときと帰るときとは雰囲気はぜんぜん違いました。燃料や物流の状況、避難所の数も変わりました。やはり現場のニーズが第一にあるべきで、

押しつけにならないためにも、思い込みや過去の経験に頼りすぎてはいけないことを、今回の活動で強く感じました。

福島が「フクシマ」にならないように

「福島がカタカナの『フクシマ』にならないように」という意味です。外国の方ならともかく、われわれ日本人がこのような書き方をすることに、私は違和感を覚えます。被災地の方や避難者の方を前にしてこう書かれると、他人ごとのような印象を私は受けてしまいます。

カタカナで書く意図もわからないわけではありません。新聞・雑誌などは、たとえば客観的な視点を強調したいとか、グローバルな視点を強調したいとか、そういった意図で書くのだと思います。しかし私は、被災地・被災者を前にして客観的になってどうするんだという気がします。わが国に起こっていることにグローバルな視点などほんとうにいるのかどうか。すくなくともわれわれのように現地で活動する人間にとって、そんなグローバルなり、客観的なの視点はいらないのではないかと、私は強く思いました。

被災地支援に携わる方は、現地情報が第一！

「客観」もグローバルな視点も不要！

われわれ被災地支援に携わる人間は、やはり現地の情報を第一に重視すべきではないかと思っています。過去の経験も大事かもしれないし、自分の思い込みも場合によっては大事かもしれない。しかし、その前にやはり現地の情報や実情をいま一度観察する必要があるのではないかと考えています。

一般的な話では、先ほど申しあげた客観性やグローバルな視点はいっぺん捨ててはどうかと思っています。そんなものはいらぬ。桐山さんのように現地に飛び込み、現地の活動にまで入り込んで、現地の主のようになれる支援こそが、ほんとうの支援ではないかと、今回強く思った次第です。

京都府では「がんばろう東北復興応援フェア」を実施しています【資料3】。前は6月18、19日に京都駅で東日本の物産展やゆるキャラの紹介やコンサートなどを開催して、たくさんの人にお越しいただきました。今回は8月6、7日に、「京の七夕」のイベントで行ないます。会場の鴨川河畔で現地の物産を再度販売する予定ですので、ぜひともお越しいただければと思います。

以上、つたない話ではございましたが、私からの発表を終わります。ありがとうございました。

第2回 安寧の都市ユニット シンポジウム
2011年7月23日 京都大学百周年記念ホールにて

ふるはし・かつや●1973年生まれ。1997年東京大学工学部航空宇宙工学科卒業。三菱重工業(株)を経て、2002年京都府入庁。京都府では、主に救急・災害医療、消防、危機管理に関する行政施策に従事。京都大学安寧の都市ユニット認定「安寧の都市クリエイター」。